偽物エルフ

文　ソティス
絵　水卯

星空の旅人

偽物エトランゼ

燃え盛る炎に故郷を焼かれながら
ハルとファミリアは出会った

片や小さな辺境の村で
慎ましくも平凡に暮らしていたただの村人

片や誰よりも完璧に
誰よりも欠けたところもなく
形作られた失敗作

愛するものを理不尽に奪われた村人は
失意に襲われながらも失敗作に手を差し伸べた
最初から何も持っていなかった失敗作は
今にも泣きだしそうな村人の手を取った

これは、魔法の世界で、魔法の使えない二人が
足りないものを探す旅

ハル

運動センスが
いいだけの普通の村人
唯一の家族である
ファミリアの為に旅をしている

ファミリア

魔法によって人工的に作られた人間
「ホムンクルス」の少女
感情と痛覚を失っており
人間味に欠けている

偽物エトランゼ

二人の旅人と殺人鬼
008
心の傷と魔法の本
066
炎の記憶
098
花房の子供
136
家族を求める者
181
家族を求める者達
216

二人の旅人と殺人鬼

二人の旅人を出迎えたのは、小さな家一軒くらいならばすっぽりと収まりそうな、見上げるほどに巨大な石造りのアーチだった。至る所に細かい彫刻が施され、そのてっぺんに掲げられたボードには、金細工の装飾とともに国の名前が記されている。

国の玄関ともいうべき門がこのように立派なものであるならば、国もさぞかし立派に繁栄しているのであろう。期待に胸を膨らませるには十分だ。門兵の男性が差し出す入国審査の書類に、入国理由や滞在予定期間を書き終え、歓迎の言葉を背にアーチを潜り抜ける。

「うわあ……！」

そこはトリメリアと呼ばれる、魔法で満ち溢れた国だった。

人々がほうきで空を飛び、魔法で起こした火をかまどにくべ、ひび割れた道路の舗装を杖の一振りで修復する。

世界の在り方を書き換える技術。魔法。

時に生命すら人工的に生み出すことさえできるといわれる魔法を、生活の一部に組み込んだ国は数多くある。

だが、国民全員が魔法使いであるかのように錯覚するほど、魔法が人々の間に浸透しきっている国を二人の旅人

は初めて訪れたのであった。

「すごいねファミリア、こんなに魔法使いの人がたくさんいる国、オレ初めて見た」

感嘆の声がため息とともに吐き出され、茶髪の旅人はその国の日常に魅せられた。

耳が隠れるくらいで短く切りそろえられたクセっ毛に、髪と同じ色をした茶色の瞳。

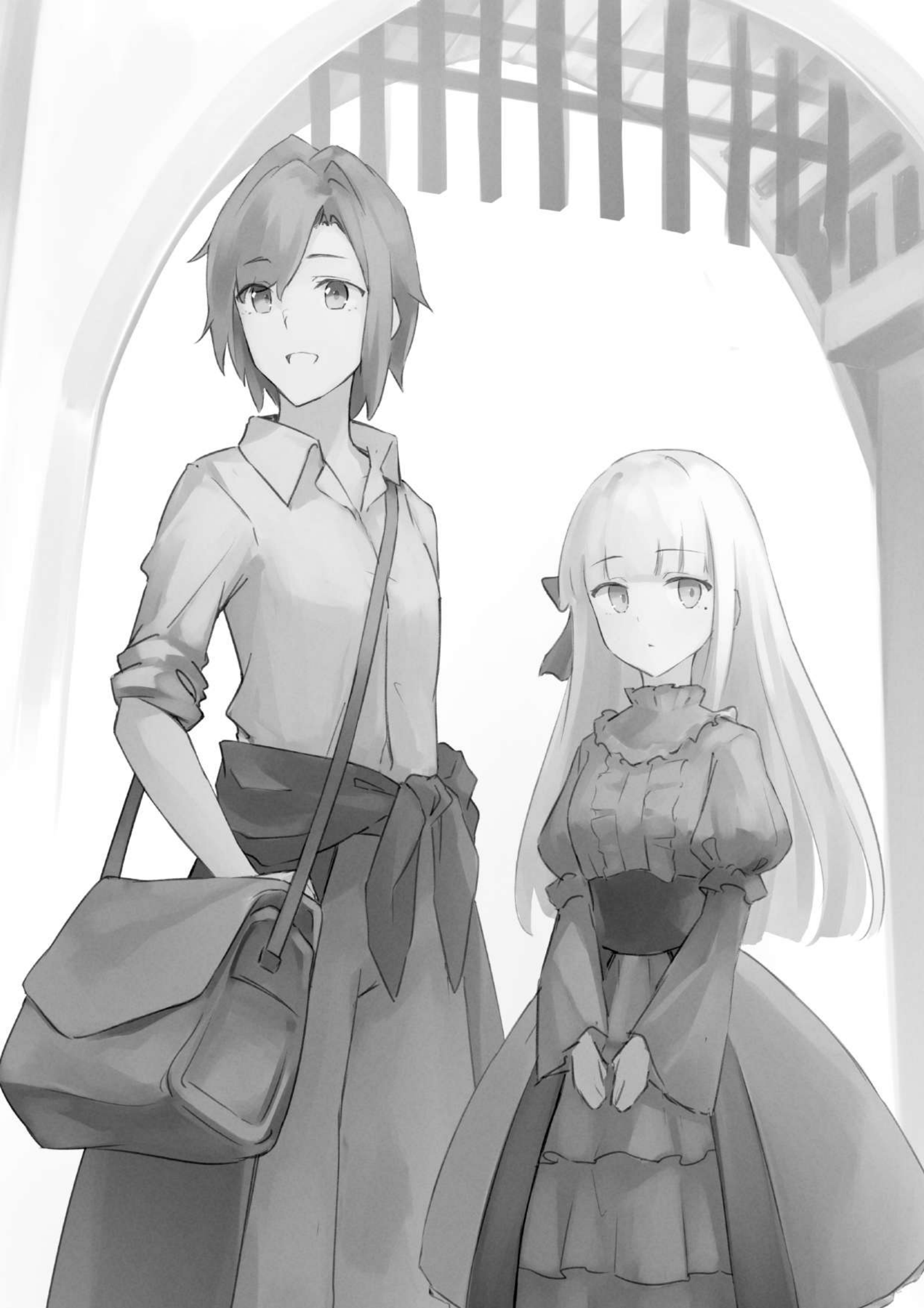
身に着けている薄いグレーのシャツや継ぎはぎだらけの赤いパンツ、肩から下げた黒のバッグは、長旅を共にし続けていたせいかどれも年季が入っている。

捲ったコートの袖の下からは、健康的に日に焼けた腕が露わになり、両手首のブレスレットにはめられた緑色の宝石は、浴びている陽の光を乱反射させた。

「私も初めて見た」

隣に立つ金髪の旅人は、隣の相棒とは打って変わって、目の前に広がる光景をただぼんやりと見つめているだけだ。

さらりとした髪は肩甲骨のあたりまで伸び、時折吹いてくる風に靡いて揺れる。



黒一色で統一されたブラウスやスカート、髪飾りのリボンが、彼女の髪や白い肌をより一層引き立たせている。半分閉じられた瞼の奥に隠れた翡翠の瞳はひどく澄み切っていた。磨き上げられた水晶玉のような瞳は、まるで目の前の光景を何も映していないと思わせるほどに、いっそ不気味と思えるほどに、不自然な美しさを放っていた。

「……もう少し何か感想とかはないの？　すごい！　とか、こんなの初めて見た！　とか」

「ない」

「そっか……」

ファミリアに即答され、ハルは苦笑いを浮かべる。

彼女の淡白な素振りはいつものことだ。いちいち真に受けていても仕方がない。一呼吸ついて気を取り直し、今度は彼女に提案を投げかける。

「まあいいや。ひとまず日雇いの仕事探しと宿屋探しも兼ねて、ちょっとこの辺りの散策でもしよっか。ちょうどお昼くらいだし、パンでも食べ歩きながらさ」

「分かった。ハルがそういうなら」
「ファミリアも、何かしたいこととかあるんなら、言ってくれてもいいんだよ？」
「早くお金を稼ぎたい」
「そういうのじゃなくて」
「でも、このままだと、明後日くらいに財布が空になる」
「そんなにお金なかったっけ。お金の管理はファミリアに任せてたから知らなかったや。あ、すいませーん、そこのパン二つくださーい！」
先ほどのやり取りはなんだったのかというように、ちょうどよく通りがかったパン屋で、なるべく焼きたてと思しきパンを二つ購入する。
ハルは買ってきたパンを一つファミリアに手渡し、空いた彼女の手を引いて再び街を歩き始めた。アーチから一直線に伸びた大通りには、花やパン、野菜に宝石類といったあらゆる商品を取り扱う露店が立ち並び、店員の女性たちがせわしなく呼び込みを続けている。

その奥にある広場では、女性の魔法使いが噴水の水を魔法で巻き上げ虹を作り出すパフォーマンスで、遊びに来ていた子供たちを喜ばせていた。子供たちのリクエストに応えているのか、水は蝶や鳥、龍へと次々に姿を変え、噴水の周りを舞うように旋回している。

二人はパフォーマンスを遠目に眺めながら、手にしたパンを齧りつつ広場のベンチで一休みした。

「メインの大通りなら人通りも多いし、役場か何かがあると思ってたんだけどな。魔法技術協会しか見つからなかったか」

「マギでも仕事の斡旋は行ってる」

ファミリアの言葉に、ハルは苦い顔をする。

「マギにも仕事はあるし、どれもこれも割のいい仕事ばかりなんだろうけど、魔法が使える前提の依頼じゃん。オレもファミリアも魔法なんて使えないし、何より危ないから行きたくない。仕事は役場か募集広告とかの仕事を探したい」

「例えば、あれとか？」

ファミリアが指さす先には、仕事の募集広告が掲示板に張り出されていた。
ハルはすっかり小さくなったパンを一口で飲み込み、掲示板の広告を慣れた手つきで剥がすと、ろくに内容を見もせずにファミリアに手渡した。
「ファミリア、それどう思う？」
ファミリアは手渡された広告を凝視すると、つらつらと流れるように内容を列挙し始めた。
「夜間警備の募集。初心者歓迎、経歴不問、男女問わず。依頼主が国からで、報酬も国から出ることになってるけれど、夜間の仕事ということを踏まえても給料が割高過ぎる」
その言葉にハルはやれやれと言わんばかりにため息をつき、首を横に振る。
「つまり、それだけこの国で危険な何かが起こっているってことじゃん。この国に来たばっかで事情もよく知らないし、危ないからこの仕事は受けられないな」
「なら、事情を知っていれば、仕事を受けてくれるのかしら？」
突然の声に驚いて振り返ると、先ほど噴水の前でパフォーマンスをしていた魔法使いの女性が、広告を睨みつ

けるハルとファミリアの前に立っていた。

「事情、教えてくれるの？」

「ファミリア、興味持たなくていいから」

「もちろん、そのためにあなたたちに声をかけているのですもの」

女性は微笑んで、国の事情を話し始めた。

「最近この国ではね、女性ばかり――――特に魔法使いを狙った連続殺人鬼が現れているのよ。犯人は手がかりも証拠も残さないから捜査は難航してしまってね。今分かっているのは、せいぜい、犯行が決まって夜に行われていることくらいよ」

つまりこの夜間警備の募集は、殺人鬼への抑止力、可能であれば確保を目的としているようだ。ハルたちに声をかけてきた魔法使いの女性も、落ち着いた態度を保ったままではあるものの、内心では自分が襲われる可能性に不安を感じているのだろう。

「なるほど、分かった。ハル」

「いや、受けないからね？」
今度はハルが即答する。
「事情を知らないまま危険な目に合うのはよくないけど、事情を知っていれば危険な目に合ってもいいってことじゃないからね？　とにかく、この依頼は絶対に受けない」
ハルは魔法使いの女性に礼をして、ファミリアの手を取って散策を再開する。
掲示板に貼りなおし損ねた広告は、ファミリアが流れるような手つきでポケットにねじ込んだ。

「らっしゃーせー。お二人でのご利用ですかー？」
「……はい、部屋は空いていますか？」
「空いてますよー。はいこれ宿帳ねー。二人用だから部屋は二階のここがいいかなー？」
店番の女性店主はなんともけだるそうに、ハルとファミリアに宿帳と部屋の鍵を差し出した。一応仕事自体はやっているが、接客業として大丈夫なのかと思うほど、彼女の対応は幾分適当だ。

ハルが鍵を受け取り、ファミリアが宿帳の名前や性別といった記入事項を埋めていく。

「見ない顔だしこの国の人ではないんだろうけど、それにしてもだいぶお疲れだね。なんかあったの？」

「いえ、ファミリアが宿屋探しにこだわりすぎるもので……」

「これは重要なこと。私達の明日につながる」

「ファミリアのは過剰すぎる」

何せ、この国を一周する勢いで宿屋を回ったのだ。その内の半分以上は徒労に終わったのだと思うと、余計に精神的に疲れが出てきてしまう。

「そんなになるまで迷った末に、ウチを選んでくれたってわけか。それは嬉しいねえ」

頬杖を突きながら店主は笑う。

いや、ぶっちゃけほとんど値段でしか決めていません。とは言えなかった。

時間の許す限りあらゆる場所に足を運んで、店の前に掲げられた看板の値段を見比べて、ファミリアは値段の最も安いこの宿屋を選んでいる。

旅の道中、何度か資金がなくなりかけたことがあったせいか、どうにも彼女には節約志向の傾向があった。それだけならばハルも別になんとも思わないのだが、彼女のそれは少々過剰すぎる。

散策中に通りがかった宿屋の値段表は全て覚えている。ファミリアがそう言ってのけた時はさすがに引いた。何がそこまで彼女を駆り立てるのか。効率重視にもほどがある。もう少しは妥協しろ。

そんな愚痴が口から出そうになるが、すんでのところで押し留めた。

店主に対して失礼になるのもそうだし、何より疲れて訂正する気が起きない。

その疲労の原因はというと、相変わらず眉一つ動かさず、涼しい顔で宿帳にペンを走らせている。

「にしても、悪いタイミングでここに来ちゃったもんだね」

「悪いタイミングって、もしかして、これ?」

ファミリアは宿帳に書き込みを続けながら、上目遣いで夜間警備の広告をポケットから引っ張り出して見せた。

ハルは突然出てきた広告に驚いてファミリアの顔を見るが、当の本人は特に気にするでもなく店主とのやり取りを続ける。

「そうそう、それそれ。国のあっちこっちに貼り出されてるでしょ。要はそれだけ危険だーってことだからね。お客さんも気を付けなよー」

「なるほど、分かった」

今しがた書き上げた宿帳を手渡しつつ、ファミリアは店主の言葉に頷いた。

「うんうん。私も自分とこの客に何かあるのは、さすがにいい気がしないからね」

店主が受け取った宿帳に目を通す。記載内容に漏れがないことを確認すると、次にファミリアから宿代を受け取った。

「それじゃ、今晩からお世話になります」

「はいよー。ごゆっくりー」

だが、これで受け付けは終わり、とはいかなかった。ふと思い出したように、店主はハルとファミリアを呼び止める。

「そうそう、お客さん。さっきその子に台帳記入させてたでしょ？　そういうの、この国にいる間はやめといた

方がいいよ」
「どうして?」
階段の手すりに手をかけていたファミリアが、間髪入れずに店主に聞き返す。
「この国じゃねー……。いや、どうせ数日すりゃ気付くでしょ」
店主は口を開きかけたが、面倒くさいといった様子で話すのを止めてしまった。それだけ分かりやすくこの国には何かがある、ということなのだろう。
曖昧ながらも店主に礼をいいつつ、二人は合鍵のプレートと同じ番号の部屋に入る。空いたスペースに押し込むように並べられたベッドも相まって、二人用にしてはやや狭い部屋は見た目以上に圧迫感があった。なるべく安い宿屋を探したのだから当然か。
とはいえ清掃は行き届いているし、別室にはトイレとバスタブがしっかりついている。寝泊りする分には申し分ない部屋だ。
「今日はもうシャワー浴びて寝よう。晩御飯は明日でいいや。今日はもう疲れた」

ハルは疲労に勝てず、部屋に入るなりさっそくベッドに倒れこんだ。

そんなハルをよそに、ファミリアはいそいそとバスタブに湯を張り始めた。運動神経や体力は間違いなくハルの方が上であるはずなのに、彼女の顔に疲労の色は全く見えない。

それどころか、仮面でもかぶっているのかと思うほどに、表情が全く動かない。

そんな彼女の様子を見て、ハルは諦めたようにため息を漏らす。夕食に風呂、荷物の整理に財布の中身の確認等々、その日のルーチンワークを終えるまで、彼女は眠りにつこうとはしない。決められた動きを機械的にこなす彼女は、ベッドにいち早く倒れ込んだハルとは対照的にてきぱきと行動した。

部屋が静かになったのに気づいて、ファミリアがふと顔を上げると、ハルがベッドに倒れ込んだ体勢のまま眠りこけていた。

「……そんなふうに寝たら風邪ひく。ちゃんとシーツ被って」

ファミリアの言葉も、ハルの耳には届かない。

ハルの革靴を脱がし、ベッドの上にちゃんと寝かし、ベルトを緩めてからシーツを体に被せてやる。それでも、

疲れが溜まっていたのか、ハルが目を覚ます様子は一切ない。

「……これでよし」

一仕事終えたようにファミリアが鼻を鳴らす。当然ここに言葉を返す人はいない。

ハルのカバンから携帯食の残りを取り出し、一人部屋の奥の椅子に座って食べ始める。その次に、備え付けのバスルームで汗を流す。それが終わると、二人のカバンと財布の中身をそれぞれ覗き込んで、何も問題がないことを確認する。

宿に入った後の、いつものルーチンワーク。普段賑やかな相棒が眠りこけているせいか、いつもより静かな夜だった。

窓の施錠がきっちりされているか確認して、カーテンを閉じる。

ベッドに腰を下ろし、軽く伸びをする。ハルの様子も確認してみるが、規則的な寝息を立てているばかりで特に変化はない。この調子ならば明日の朝までぐっすり眠っていることだろう。

ポケットに押し込んでいた広告を広げ、内容を再度確認する。宿屋に入る前に役場に立ち寄って、夜間警備以

上に割のいい仕事がないことは確認済だ。
部屋の鍵を持って外に出ていったファミリアを止める人も、当然、いなかった。

「ハル、起きて」
翌朝、ファミリアの声にハルが薄目を開いた。まだまどろみの中にいるようで、ハルの焦点は今一つあってていない。
そのハルを、ファミリアは平手打ちで文字通り叩き起こす。
小気味のいい乾いた音が、狭苦しい部屋中に響き渡った。
「痛った!?　ちょっとファミリア、起こすときはゆするだけでいいっていつも言ってるじゃん!」
「でも、強くたたいた方がすぐ起きるから効率がいい」

「そういうことじゃないってのに、ああもう赤くなってきてる……」

寝起きにまで効率なんて求めなくてもいいだろうに、とぼやきながら、ハルはベッドから起き上がる。痛む頬をさすりつつ、ハルは洗面台の鏡で顔を確認してみる。案の定、叩かれた左頬は赤く腫れあがっていた。

ハルもこれで寝起きはいい方だ。別に叩かれずとも普通に起きられる。精密な時計のように、異常なほど正確な時間に目を覚ますファミリアが基準になっているせいで、相対的に朝に弱いように見えているだけだ。

ハルの目ははっきりと覚めてしまったが、腫れた頬を冷やす目的も兼ねて冷水で顔を洗う。部屋に戻ってみると、ファミリアが先ほどのやり取りなどなかったかのような顔をして、朝食のパンを口にしている。

ハルもファミリアの向かいに座り、テーブルに並べられたパンを手に取る。水を飲んで一服してから、二人はお互いの今日の予定を確認し合う。

「オレは今日から役場で求人のあった、採掘現場の仕事を始めようかって考えてる。国の北の方には、宝石とか鉱石とかが採れる山があるんだって。朝から面接をやって、早ければその後すぐに仕事に入ることになると思う。ファミリアは今日はどうするの？」

「今日は食料品を買い足すつもり」
「分かった。多分お昼ご飯は職場で食べることになるだろうから、夕食は一緒に食べよっか」
そうした会話を交わしながら身支度を済ませ、ハルは仕事先へと出かけて行った。
ファミリアはハルが出て行ったのを見届けると、階下へと降り、宿屋の受付へと向かう。
朝だからかことさら気だるげそうにする女性店主が、カウンターに肘をついたまま挨拶をしてくる。
「おはようさん、もう起きたなんて、精が出るねえ」
「おはよう」
ファミリアは無機質に挨拶を返して、続けざまに目的を口にした。
「殺人鬼に関する記事が載った新聞を貸して欲しい、それとこの国の地図も」

ハルが北部へ向かうにつれて、周辺の露店は徐々に数を減らし、鉱山周辺まで来る頃には建物はほとんど姿を消した。代わりに広がっているのは、むき出しの岩肌にまばらに生えた雑草や、乾いた風に砂ぼこりが舞う荒涼とした景色だ。

その中にぽつんと建てられたトタン屋根の小屋の扉を、ハルは挨拶と共に潜り抜ける。中では現場監督の男性がハルを待っており、机の向かいの椅子に座るよう促された。

行く先々であらゆる仕事を行いながら旅費を稼いできたハルにとって、面接に受かることはもはや朝飯前だ。今回も面接は難なく合格し、午後からは先輩の指導の下仕事に入ることとなった。

「えっと、ハル君は、前にもこういう仕事は、したことがあるのかな」

「いえ、力仕事は何度かありますが、採掘現場は初めてです」

「そっか。なら最初に軽く説明しておくと、僕は基本的に、採掘作業で出た土を運び出したり、備品や道具の管理をしたりしている。いわば作業の裏方を担当しているんだ」

「なるほど」

「初めての人が、いきなり採掘作業に混ざるのは、難しいだろうから、まずは僕の手伝いをしつつ、現場の雰囲気に慣れてもらって、それからどうするかは、監督との相談次第かな」

「分かりました」

現場監督からハルの指導を任されたロッカスは、ハルと雑談を交えつつ猫車を押していた。彼は現場では珍しい内気な男性で、緊張のせいか彼の言葉は途中で何度も詰まり、終始おどおどした様子で周囲を見渡しながら仕事に励んでいる。

お世辞にもたくましいとは言い難い体躯は、筋骨隆々な他の作業員たちのおかげで余計に華奢に見えてしまう。採掘の最中に出た土は、猫車に乗せられ仕事の邪魔にならない所まで運ばれていく。現在ロッカスが担当しているこの業務は、採掘現場を一歩離れた場所から観察でき、かつ掘削作業中の作業員ほど危険な行動も取らないため、新人が行うにはぴったりな業務だという。

「これ、普段はロッカスさん一人でやっているんですか?」

「そう、だね。他の業務で手が回らなくなってきたときには、誰かに応援に来てもらっているけれど、いつもは

僕一人で回してるね」
「大変、ですね……」
「大変だよね。僕も、何度もミスしては、怒られたものだよ」
土砂の積まれた猫車は想像以上に重い。地面もでこぼこしているため、気を抜くとすぐにひっくり返してしまいそうだ。隣で笑うロッカスは、大変だと同意しながらも業務を平然とこなしている。
「ロッカスさんは、トンネル内での採掘には参加しないんですか？」
「僕には穴掘りできるだけの、体力がないからね。僕は、僕にできることをやるんだ。おーい、監督ー、新しい水持ってきましたよー！」
そう言うや否やロッカスは、採掘現場を指揮する現場監督のもとへと走っていってしまった。
現場監督と二、三言葉を交わし、笑って脇腹を肘で小突かれながら、ロッカスは水の補給を終えハルの元へ戻ってきた。
「それじゃ、続き行こっか。残り二つのトンネルの、土の回収と水の補給が終わったら、僕はしばらく、物資の

管理と点検をするから、ハル君はその間、少し休憩していてね」

今日入ったばかりの新人に、一人で現場を周回させないよう休憩時間を設けたのだろうが、本来ならばその時間も土砂の運搬で現場を回っていたことだろう。

裏方と口にしていたが、一日中歩き通しのため仕事内容はとてもハードなものだった。

その日の仕事が終わったころには、ハルは椅子にへたり込んで休んでいた。

「お疲れ様、今日の仕事はどうだったかな?」

そんなハルに、ロッカスは水の入ったグラスを持って労う。

「結構しんどいですが、なんとか大丈夫そうです」

首にかけたタオルで汗をぬぐいながら水を一気に飲み干し、一呼吸おいてからハルが答える。

「そっか、それならよかった。この仕事体力勝負なところがあるから、すぐ辞めちゃう人も多いんだよね」

ロッカスが頬をかきながら困ったように笑う。

「そりゃ、こんなきつい仕事を毎日するんでしょう？　そりゃ辞めたくもなりますよ」
「そうだよね。でも大丈夫、できないことを無理にやろうとする必要はないから。僕たちは僕たちのできることをやればいい」
「そういえば、仕事中にも同じようなこと言っていましたよね。誰かの言葉だったりするんですか？」
「僕がこの仕事に就いて間もない頃、現場監督に言われた言葉だね。正直、僕もこの仕事は向いていないと思ってる」
ロッカスはハルの隣の席に着いて、膝の上に置かれた自分の両手に視線を落とす。そこからしなやかに伸びる彼の腕は、たやすく折れてしまいそうな小枝を想像させた。
彼の性格や体格を考えれば、どちらかと言えば室内で読書なんかを好みそうなイメージに合う気がする。なぜ彼はこの仕事を続けているのか、ハルも仕事中それをずっと疑問に持っていた。
「けれど、現場監督は『お前は自分にできることをやればいい』って言ってくれたんだ。お前みたいな真面目で視野の広い、細かいところまでよく気が付く奴は他にいない。ウチのガサツな連中にはできないことが山ほどあ

るから、そいつを安心して任せられるって。そんなこと、今まで言われたことなかったからさ。すごく嬉しかったんだ。だから、僕はここで力になりたくて、採掘の仕事を続けてるんだ」

言葉に詰まりながらも、ロッカスは昼に会ったばかりのハルに素直な気持ちを語ってみせた。その時見せたロッカスの穏やかな笑みが、口にした言葉以上に彼の想いを物語っていた。

「ってことがあったよ」

「そう」

とっぷりと陽も落ちたその日の晩。宿屋の近くにあったレストランで、ハルとファミリアは夕食をとりながら、その日あった出来事を話していた。

ハルが注文したのは今日のおすすめディナー。パンとコンソメスープ、トマトとコーンのサラダに、中央のプ

レートには厚切りの豚ロースのソテーが鎮座している。
ファミリアが注文したのは店で一番安いメニューのペペロンチーノを一つだけ。それを器用にフォークで綺麗に巻き取って食べている。
「ファミリアは今日何してたの」
口の中の豚ロースを飲み込み、ハルが尋ねる。
「昼まで寝て、あとは街の散策」
パスタを巻き取る手を止めることなく、ファミリアが手短に答える。
「ファミリアが昼寝とは珍しい。やっぱり疲れてたんじゃん」
「私だって自分が疲れていることくらいは分かる」
「分かってても構わず行動するから、ファミリアはたちが悪いんだよ。無理だけはしないでよ?」
「もちろん。ハルが昔言った通り、死ぬようなことはやらないようにしてる」
「死ななければ何してもいいって思ってるでしょ」

なんのことだか分かりませんといった様子で、ファミリアが首を傾げる。
そんな彼女にため息を吐いて、ふと思い出したようにハルが話題を変えた。
「そういえば、なんだけどさ。昨日宿屋の店主さんが言ってたこと、なんとなく分かった」
それに対し、ファミリアも表情を変えないまま答える。
「それなら、私もたぶん分かった」
一呼吸置いたのち、二人はほぼ同時に、その日見つけた違和感を口にした。
「色々なお店を見て回ったけど、店員がみんな女の人だった」
「魔法が栄えている国なのに、採掘現場で働く魔法使いがいなかった」
一般的に、魔法を扱う才能は男性よりも女性の方が高い。魔法使いのランクの最高位である魔女という称号が、その名の通り女性のみに与えられることからも、性差による能力差ははっきりと存在していることが窺(うかが)える。
その性質から、魔法の栄える一部の国では、国全体の風潮が女尊男卑の傾向にあるという。
今二人が滞在しているこの国が、まさにそうなのだ。

店の顔たる店員が男性だと不都合が生じるのだろう。
危険な仕事はすべて男性に任されているのだろう。
「それに、魔法使いの正装を取り扱う店が全て男子禁制だった」
「……酷い話だね」
魔法使いの伝統的な正装としてローブが存在しており、本来それは男女問わず着用していいものだ。
しかし、この国でのローブは女性の魔法使いだけのものであるようで、そこには『魔法が使えようとも男性は魔法使いとして認めない』というこの国の特権的な思想が透けて見える。
かといって、それを知ったところで、二人にできることなどない。お互いそれは分かっているので、それ以上のことは口にしなかった。
「ファミリアに宿帳を書いてもらうのはよくないってのも、そういうことは率先して男性がやれって意味だったんだろうね」
「つまり、そう見られているってことだから、いいことだと思う」

「あー……。まあ、それもそうか。今の仕事を取れたのも、これのおかげでもあるわけだし」

ハルは身に着けている男物の服を一瞥して、もう一度ファミリアに視線を戻す。

「あそこ給料は悪くないし、いい人ばっかだし、なにより体動かすのが性に合ってるんだよね。街を出るまではずっとあそこのお世話になるつもり」

ファミリアはハルの話に一言「そう」と返して、グラスの水を飲み干した。

「それじゃ、ご飯食べ終わったんなら宿に戻ろうか」

「うん。お風呂はハルが先に入る?」

「先に入る。今日も疲れたし、もしかしたらまたすぐ寝ちゃうかも」

「それは気にしなくてもいい。明日もちゃんと起こす」

「今日みたいに叩かなくてもいいからね? 普通に起こすだけでいいからね?」

「でも叩いた方が早い」

「分かった。そこまで言うなら明日どっちが先に起きるか勝負しよう。それで先に起きた方は、負けた方を叩い

て起こす。これでどう?」
「その条件だと、私が絶対に勝つけれど」
「いーや、明日は絶対オレが先に起きる。ファミリアに人の痛みを教えてやる!」
「そう言われても、人の痛みは私には分からない」
そんな他愛のない会話を繰り返しながら、二人は宿屋に戻った。
ハルの予想通り、仕事の疲れのせいか、ハルは入浴後すぐにベッドに倒れこむと、昨日と同じようにそのまま寝息を立て始めた。
ファミリアも昨日と同じようにハルをちゃんとベッドに寝かせ、昨日と同じようにシーツを被せる。そして、ファミリアが音も立てずに部屋から抜け出したことも、ハルは昨日と同じように気づきもしなかった。

件の連続殺人鬼による五人目の被害者が出てしまったことを知ったのは、その次の朝のことだった。
「どうしたの。なんだか、元気なさそうだけれども」

翌日もハルはロッカスの下について、昨日と同じ作業に従事していた。だが、その顔は晴れない。
「そういうロッカスさんだって、疲れたような顔じゃないですか」
指摘したロッカスも似たり寄ったりの顔色だ、明らかに昨日の仕事の疲れが抜けきっていないようだった。
「ちょっと趣味に没頭しちゃって、寝足りて無いんだ。ハル君は？」
「いや、また被害者の方が出てきたって聞いたら、元気なんて出ませんよ」
「そうだね。それに、今回被害にあったのは魔女だったって、朝はずっとその話でもちきりだったね」
昨夜の事件は瞬く間に国中に広まったようで、もはや誰も彼もが一番にその話題を出しているほどだった。特に今回の被害女性は魔女だったこともあり、トリメリアは、これまでとはまた違った緊張感に包まれていた。
「夜間警備の人員も増やすって、役場の人も言っていましたね」
「そっちの仕事も、引き受けるのかい？」
「今の仕事で手一杯ですし、なにより危なっかしいので受けませんよ。でも、早く解決すればいいなとは思います」

「そう、だね」

彼がそう言いながら表情を一瞬曇らせたのを、ハルは見逃さなかった。

「どうかしましたか？」

「いや、ね。夜間警備を増やすと言っても、結局、やるのは男の人だろうからね。こういう時に魔法の使える女の人が参加すれば、すごい抑止力になると思うんだ」

「でも、女性は進んで参加しようとしない」

ハルが言葉を引き継ぎ、ロッカスがそれに首肯する。

「自分には関係ないって、思っているのと、自分は襲われたくないって、みんな思っている。そう思うのは仕方ないと、僕も思う」

どもりながらも、ロッカスは言葉を紡ぐ。

温厚で、かつ自分の意見をあまり表立って主張しない彼だが、この時ばかりは自分の考えを止められないでいる。

その姿は、少し怒っているようにも見えた。

「でも、こういう仕事は男がやるべきだって考えている人が、まだ大勢いるんだ。僕はそれが、許せない、かな」

各々が得意な、できることをやればいい。

国全体を包む女尊男卑の考え方は、ロッカスの考え方に合わないのだろう。

それ以前に、不当に虐げられていい気分になれるはずもない。

「それはそうとして、そのほっぺたどうしたの？」

雰囲気が暗くなっているのを察してか、ロッカスは別の話題をハルに振った。

「オレと一緒に旅してる、ファミリアって女の子がいるんですけれど」

「ああ、昨日の仕事終わりに、現場までハル君を迎えに来てたあの子だね」

「……毎朝、早く起きろって叩いてくるんですよ」

平手の跡がまだかすかに残る左頬を、ハルは苛立たしそうにさすりながら答えた。

「それじゃファミリア、明かり消すよ。おやすみ」
「うん、おやすみ」
それから数日、ハルは変わらず鉱山での仕事を続け、ファミリアはハルが寝静まった後に宿から抜け出す日々が続いた。
宿屋を後にしたファミリアは迷うことなく、滞在初日に魔法使いに声をかけられた広場へと向かう。月明かりがほのかに照らす広場には、夜間警備に集まった男性たちが大勢待機していた。連日の仕事ですっかり打ち解けた男性が、ファミリアの顔を見るなり寄ってきて声をかける。
「おうファミリアちゃん。今晩も来たか。毎晩頑張るね」
「私も働いた方が、多くお金が稼げて効率がいいから」
「でも無茶しちゃいかんよ？　なんせ狙われてるのは全員女性だからな。被害が出ないよう警備に来た奴が襲われたんじゃあ、本末転倒もいいとこだ」
「分かってる。死んだらダメってハルも言ってた」

「そのハルって人にはもう伝えてるのかい？　この前聴いた時は、夜間警備の仕事をしていることは黙ってるって言ってたじゃねえか」

「言ってない。ハルはこの仕事は危ないからやりたくないって言っていたし、私がこの仕事をしていることを知ったらきっと反対する」

「そりゃ、ファミリアちゃんのことを大切に思ってるからだろうさ。もっと他にも仕事はあっただろうに、そっちにいってもいいんだぞ？」

「私が知る限り、この仕事が一番給料が高い。殺人鬼を捕まえれば追加報酬も出る。それに、死ななければ問題ない」

「そういうことじゃないとは思うんだがな……」

「それと一つ連絡がある、明日から暫く休む」

「え、ああ、問題ないが、突然だな」

「その方が結果的に報酬が高くなる」

「……？」

「おーい、そろそろ始めるぞ。一度噴水前に集合しろー」

現場の責任者が集まった警備員たちに号令をかけ、それぞれ三、四人のグループに振り分けていく。あとはグループ毎にひと塊になり、一晩中国内の路地裏や目立たない場所を巡回していく。それだけでもある程度の抑止力にはなるのだが、肝心の殺人鬼の足取りが掴めないままなので、徹底した調査と警備を求める市民の声は、日増しに増えていく一方だ。

当然、高らかにその声を上げる女性たちは、誰一人として警備に手を貸しはしない。

その態度に、警部に集まった男性たちですら、表には出せない不満を日々募らせていく。

胸の内の叫びをあくびに変えながら、その日も夜は更けてゆく。

「なんなんですか、あの人達？」
翌日も鉱山労働に従事していたハルは、遠目に見える黒いローブを纏った集団を指さす。
衣装は元より、彼らが纏う気取った雰囲気は鉱山には似つかわしくない。
隣で作業に従事していたロッカスは、面白くなさそうに答える。
「魔法使いの人たちさ、鉱山を運営する会社の査察だよ」
「へえ、じゃあいつもと業務が違ったりするんですかね」
「特にそういう事はないんじゃないかな、でも……」
ロッカスは俯いて言い淀む、ハルは疑問符を浮かべるが、その答えはすぐにわかった。
遠くで現場監督と言葉を交わしていたローブの集団のうち三人が、ハル達を含む労働者が働いている場所へとやってくる。
三人の先頭を務める一人が、労働で汚れたハル達を疎ましそうに一瞥し、ぶっきらぼうに言った。
「座る所はないのかしら」

労働者の一人の男が、焦った様子で周囲を確認する。小さい椅子でもあればよかったのだが、そんな気の利いた物はない。

男は悩んだ末に木箱に目を付けると、比較的綺麗な布をかけ、おどおどした様子で差し出す。

「すみません、これくらいしか……」

女はこれ見よがしに溜息をつくと、手を払う動作で男を追い払う。

「……もういいわ」

不機嫌なのを隠そうともしない女は、杖を懐から引っ張り出すと、それを地面に向けて振った。

杖の先から青い光が放たれ、それが地面に衝突して淡く消えると、光の残滓の中に水晶で出来た椅子が現れる。

女はそこに座ると、偉そうに足を組み、椅子の手すりに肘をついたまま口を開いた。

「今月のノルマが未達よ。このままだとあなた達の給料を減らさざる得ないわ」

見れば奥にいる現場監督が魔法使い達に必死に頭を下げている、その光景はわかりやすくこの国の縮図だった。

「……っ」

その光景を見たロッカスは顔を歪める、現場監督に救われた過去があるからか、監督が誰かに頭を下げているのは見るに堪えないのだろう。

「私達が三日あれば達成できるノルマすら達成できないなんて、男の非力さには呆れるわね」

魔法使いは見せつけるように杖を一振りすると、ハルたちが人力で移動させるのに三十分はかかるであろう土の山をものの一瞬で移動させてみせる。

「汚れるって事に目をつむれば、楽な仕事なのに」

そう言って、魔法使いはつまらなそうに欠伸する。

「まあとにかく頑張りなさい、路頭に迷いたくなかったらね」

魔法使いはそんな言葉と共に、意地の悪い笑みを浮かべ、満足げに去って行った。

決して気分の良くない場面に立ち会ってしまったハルは、苦々しい表情を貼り付けていた。

「なんだか高圧的でしたね……」

ロッカスは息を吐き、ゆっくりと答える。

「あの人たちはいつもそうなんだ、わざわざああやって見せつけてくる」
どうしようもない感情が爆発しないように、慎重に言葉を取り扱う。
「監督だって、僕たちだって、押し付けられた役割を必死にこなしているのに」
「ロッカスさん……」
その沈痛な面持ちに、ハルの言葉は立ち消えてしまう。
理不尽に苛まれ佇むばかり彼に、ハルが出来ることは無かった。

その日の夜、夜闇が空を覆い、人々が寝静まった頃。
妖しい虫の鳴き声と品の無い笑い声が響く裏路地で、フード姿の男が不気味に佇んでいた。
裏路地には安っぽい酒屋が立ち並んでおり、そこの利用客に不審な格好の人物は少なからず存在しているが、

その男が纏っている雰囲気はただの無法者とは違う物を感じさせる。

男はフードのスリットから鋭い眼光を振りまき、品定めをするように裏路地を往来する人間を物色する。

しかし彼のお眼鏡に叶う何かは無かったようで、苛立たし気に足元の木箱を蹴り飛ばして、裏路地の奥、貧困街じみた細道に足を踏み入れる。

細道に侵入した途端、彼は微かに口角を吊り上げる。

彼の視線の先には木箱に寄りかかって眠りこける一人の人間。きっと裏路地の酒屋で酔いつぶれてここに流れ着いたのだろう。

その人物は女の魔法使いが身に着けるローブを毛布代わりにしており、自分の出目を強調するかのように近くに杖が落ちている。

「女、だ」

フード姿の何者かは歓喜の呟きを口にする。

酔い潰れた人間はローブを毛布の如く使っているせいで、容姿は窺えない。

しかし、闇の中にあっても目立つ金色の長髪がローブから零れており、女であることは容易に想像が出来る。
フード姿の何者かは懐に手を突っ込むと、鈍く輝くナイフを取り出す。
彼こそが、件の連続殺人鬼だった。
殺人鬼は愉悦とも怒りとも取れない表情を浮かべたまま、酔い潰れた女へと一歩ずつ距離を詰めていく。
そして、正面に立ち。真上から見下ろす。
「傲慢な魔法使いに制裁を」
自分を正当化するように独り言ちた後、ローブにナイフを突き立てる――――その時だった。
ローブの下から女が弾かれたように飛び出し、ナイフを持った殺人鬼に体当たりを仕掛ける。
ナイフを持った腕が弾かれ、女の金の髪が宙に踊る。
闇夜に浮かんだ表情は感情を宿しておらず、その瞳はひどく澄み切っている。
ローブの下に潜んでいたのは、ファミリアだった。
「く、くそうっ！」

振り向きざまに振るわれたナイフを、ファミリアはローブを脱ぎ捨てつつ一歩引き回避。そして、間髪入れずに懐に潜り込み、再度の体当たりでそのまま押し倒す。

殺人鬼はバランスを崩しつつも、ナイフを振るって抵抗を見せる。ファミリアは乱暴に振り回した左腕を相手の腕にぶつけ、殺人鬼の手からナイフを弾き飛ばす。そのままの勢いで殺人鬼の肩をつかもうと続けて腕を伸ばすが、殺人鬼も捕まるまいと彼女の手を振り払う。

だが、夜闇の中で、そう何度も彼女の手を逃れることはできなかった。裏路地に捨てられていたゴミを跳ね飛ばし、その騒音の中で揉み合いを続け、ファミリアを二度、三度と振り払うが、やがて殺人鬼は背にした壁に逃げ道を阻まれ制止した。投げ出した両脚はファミリアにのしかかられ、逃がさないよう左手で肩を掴まれている。

「確保完了」

涼しい声だった。先ほどまで命のやり取りなどなかったかのように、彼女は落ち着いていた。

彼女は足元に脱ぎ捨てたローブを片手で拾い、殺人鬼に問う。

「それで、あなたはどうして人を殺したの？」

「……え？」

「一連の事件については、色々な人から話を聴いてきた。けれど、事件を起こすことで、あなたが得られるメリットが分からない」

「メリット、か。まあ、なくはないよ」

彼女の言葉に違和感を覚えつつも、殺人鬼は諦めたようにぽつぽつと話し始めた。

「旅人の君は、知らないかもしれないけどね、この国にはね、男の人と女の人で受けられる待遇が違うんだ。魔法の扱いに長けているのが、女性が多いからって理由なのだけれど、そのせいで、僕たち男は、今まですごくひどい目に合い続けてきたんだ」

その声は、次第に奥底に燻っていた感情をあらわにさせていく。

「……っ！　ただ男に生まれたというだけで！　ただそれだけの違いしかないというのに！　どうして僕らだけがこんなにも！　みじめな思いをしなきゃならないんだ！　こんなの、あまりに理不尽すぎるだろう！」

男の顔が醜く歪む。

「だから僕は、男は女に劣らないと証明したかったんだ。杖さえ持ってなければ魔法は使えない。最初は路地裏なんかの目立たない場所で殺した。用心されるようになってからは配達を装って家に上がり込んでから殺した。ターゲットの行動パターンも調べ上げた。人通りの少ない、目立たない場所も移動ルートも見つけた。五人目でようやく魔女を殺せた。何も魔法だけがすべてじゃない。女だって魔法使いだってただの人なんだ。凡人の僕にだって、魔法使いを殺せるんだ！」

「あなたは怒っているの？」

彼の言葉を聴いて、ファミリアは首を傾げた。感情のままに叫ぶ殺人鬼を前にしても、ファミリアの様子は相変わらずだ。

……あまりに変わらなさ過ぎた。

ファミリアの左手の甲から垂れた血が、殺人鬼の薄手のコートを湿らせ始めた。どうやら先ほどの乱闘で怪我をしていたらしい。だが彼女の手の力は緩まない。殺人鬼が抵抗して逃げられるのを防ぐためか、彼の激昂を見てからさらに力が入り続けている。

出血量からして、浅い傷ではないはずなのに。
それに気づいて、殺人鬼は先ほどの違和感の正体を理解した。
彼女は今、傷の痛みも、死への恐怖も感じていない。
「あなたは今、変な笑い方をしている。ハルは笑顔は嬉しい時や楽しい時にする顔だって言ってた」
路地裏にわずかに月明かりが差し込み、彼女の顔を淡く照らし出す。まっすぐに向けられた視線から、殺人鬼はどうしても目を背けることができないでいた。
「あなたは今怒っているの？　それとも嬉しいの？　両方なの？　怒ってるから嬉しいの？　嬉しくて怒ってるの？　ほんとはまた別の気持ちなの？　だとしたら今どんな気持ちなの？　分からないから、私に教えて？」
磨き上げられた水晶玉のような瞳は、まるで目の前の光景を何も映していないと思わせるほどに、いっそ不気味と思えるほどに、不自然な美しさを放っていた。
「君、もしかして……ホムンクルス、なのか……？」
時に生命すら人工的に生み出すとされいわれる魔法。

だが、その技術は未だ不完全だ。ある時は身体の一部が、稀にではあるが感覚の一部が、どこか欠けた状態で完成する。

人を定義する諸要素が欠落しているファミリアと多少の問答を交わせば、彼女をホムンクルスだと疑って当然だろう。

「そう」

ファミリアが素直に首肯すると、殺人鬼は納得がいったように溜息をつく。

彼の目の前にいるのは、感情と痛覚を初めから持ち合わせていない、人の形をした全く別のなにかだった。

「オレの家族に、手を出すなぁっ――！」

叫び声とともに突如乱入してきたハルは、ファミリアが押さえていた殺人鬼を容赦なく蹴り飛ばした。周囲のゴミ箱やら木箱やらを蹴散らしていく殺人鬼に目もくれず、ハルはファミリアを怒鳴りつける。

「こんなところで何してんのファミリア！　変な時間に目が覚めたと思ったらいなくなってるし、色々聞いて回ったら裏路地で見たって聞いて、いざ来てみれば争ってる音がして、駆け付けてみればこんな怪我しちゃって……」

ハルが持ち上げてみせたファミリアの左手からは、なおも血が流れ続けている。
「殺人鬼を捕まえたら報酬が出るから、捕まえていた。それよりハルこそ、寝ないと明日の仕事に差し支える」
「今それどころじゃないでしょ！」
ハルはファミリアのローブの下のポケットからハンカチを引っ張り出し、包帯代わりに傷口に巻き付ける。
気休め程度にしかならないだろうが、ないよりはましだろう。
ハンカチを結び終えたハルは、ふとファミリアが何かを抱えている事に気づく。
「……というか何その布？」
「魔法使いのローブ、殺人鬼のおとりになる為に買った」
何食わぬ顔で告げられた言葉に、ハルは眉根を寄せる。
それをどう受け取ったのか、涼し気に言葉を続ける。
「心配しなくていい、最安のを選んだ」
「そうじゃないでしょ！？　そんな危ないことはしちゃダメだよ！」

「でも死んではいな――――」

ハルは、首を傾げ抗弁するファミリアを抱きしめ、ファミリアの言葉に被せるように呟いた。

「ファミリアはオレにとって、たった一人の家族なんだから……」

その後ろで、やっと痛みから回復した殺人鬼がうめき声を上げながら起き上がる。

「その子……」

ハルは警戒して殺人鬼の方に向き直るが、彼の顔を見てすぐに警戒を解いた。

「ロッカス、さん……？」

今しがた現場に辿り着いたハルも、状況は言われるまでもなく理解はしている。

ただ、感情が追い付かない。

立ち上がったロッカスは二人に歩みを進め、三歩ほど離れたところで立ち止まる。もう抵抗する気はないようで、両手はずっと挙げたままだ。

「そんな、どうして……？」

「ハル君には前にも言っただろう？　僕は、ただ許せなかったんだよ」
ロッカスはハルたちに両手を差し出した。
「さて、僕もこれ以上は逃げられないだろう。僕の身柄は、君たちが国に引き渡してくれ」
「いいんですか？」
「潮時さ、いつもだったら計画を立てていたけれど、今回は自分が止められなくて、通り魔をしてしまった。こんな杜撰な事をしてしまうようじゃ遅かれ早かれ捕まったさ」
彼が直情的に犯行に及んだのは、仕事中の出来事が引き金なのだろう。
ハルもそれを察しているからか、苦々しい表情で押し黙る。
「それに、この国を変えたくて起こした事件だったけれど、我ながら上手く行き過ぎた。それこそ、この国の人間では、もう収拾がつかないくらいにね。だから、幕引きは君達にお願いしたい」
本当は、こんなことを君に頼みたくはないんだけれどねと、彼はぼそりと付け足した。
「その代わり、と言ってはなんだけど、君達は明日、夜間警備の報酬を受け取ったら、すぐに荷物をまとめて、

この国から出て行ってくれないか。大変な罪を犯した僕が捕まったとなれば、きっとこの国全体が混乱すると思う。その騒動に、君たちを巻き込みたくはない」

それを聴いたハルはロッカスの顔を見ていられずに俯いて、ファミリアは何でもないかのように、彼の手首をそっと握った。

もう逃げるつもりもないのだろうから、これ以上の拘束も不要だろう。

「そうだ。最後に一ついいかな。君達は、どうして旅をしているんだい？」

ロッカスは思い出したかのように、ハルに質問を投げかけた。

片や魔法も何も使えないただの人間。片や非常によくできたまがい物。

その珍妙な組み合わせは、ロッカスでなくとも疑問に思うだろう。

「ファミリアの感情を、取り戻すためです」

ハルはロッカスの問いに迷いなく返答した。

欠落箇所の回復。

ホムンクルスの研究を行った者は数多くいるが、欠落箇所のない完全なホムンクルスを完成させるに至った人物は、とある例外を除けば誰一人として存在しない。
また、欠落箇所を後天的に補完する研究も幾度となく行われているが、こちらも同じく成果が上がった試しはない。
その誰も成し得なかったことに、このただの旅人は挑もうというのだ。
それがどれほど無謀なことかは、想像に難くない。
「……そっか」
何かを言いかけて、止めて、納得してからロッカスがため息を吐く。
旅人の茶色の瞳の、あまりの眩しさに当てられて何も言えなかった。
「君達の旅路が、よいものであることを祈ってる」
最後にロッカスは、二人に精一杯微笑みかけてみせる。
気付けば東の空が、白く明け始めていた。

翌日、国全体を恐怖に陥れた殺人鬼が、勇敢な旅人たちの身を賭した確保劇の末、身柄を拘束されたというニュースは、瞬く間に国中に広まった。そしてまた、彼の思想も同時に国中に伝わっていった。それを耳にした男性たちの、これまで抑え込んでいた思いは爆発し、今や男性の地位向上を求めるデモ活動が連日盛んにおこなわれているという。

どうやら彼があの夜話した筋書き通りに、トリメリアは今混乱のさなかにあるようだ。

次に訪れた国の門兵が話す内容を聞きながら、ハルはちらりとファミリアの方を見た。

彼女は噂話に一切興味を示すことなく、入国審査の用紙に黙々と必要事項を記入している。魔法で治療された左手には傷跡一つ残っておらず、仕舞っている財布は追加報酬でぱんぱんに膨れ上がっていた。

興味を持ったところで、件の国がこの先どのような国に変わるのかは知る由もないし、知ったところで自分に

は関係ない。だから、これ以上興味を持っても意味がない。
感情の代わりに効率で物事を推し量る彼女のことだ。おそらくそう思っているのだろう。

「ファミリア」
入国審査を終え、国内に通された後、ハルはふとファミリアに話しかけた。
「トリメリアで起きたこと、ロッカスさんのこと。ファミリアはどう思った？」
「特になにも思わなかった」
ハルの問いに、ファミリアは短く返しただけだった。
国の誰しもが抱えていた現状に対する怒りを、本人以上に気付き、思いをくみ取り続けた結果、最期には刃を手に取ってしまった殺人鬼。彼の強い怒りは、ファミリアの感情を取り戻すきっかけになるかもしれなかったが、どうやら今回も失敗に終わったようだ。
気を取り直して、今度は彼女に提案を持ち掛ける。

「ひとまず、夜まで時間はあるし、ちょっと散策でもしてみよっか。ファミリアは何かやりたいことはある？」

「それなら、一緒に仕事も探しておきたい。いくらか持ち合わせは増えたといっても、仕事をせずに暮らせるほどじゃない」

「そうだったんだ……。分かった。まずは仕事探しから始めようか。でも、もう危ない仕事は絶対にさせないからね？」

ファミリアの鼻先に指さして言うが、ファミリアの表情はやはり変化がない。

ハルの言うことに渋々頷くでもいい、突如向けられた指に驚くでもいい、いつかその鉄面皮を歪めてみせる。

出会いと別れ、その繰り返しの旅の中で、彼女の感情を取り戻す何かがきっとある。

そう信じて、ハルは相棒の手を取って歩きだした。